

# 吉 向 焼

●所在地／双海町上灘 ●所有者／個人

- <sup>りょくゆうし し こうろ</sup>緑釉獅子香炉 高さ 13.0cm 径 10.5cm 二代目<sup>かめじ</sup>亀治作
- <sup>はいせん</sup>盃洗 高さ 12.7cm 径 13.5cm 三代目<sup>よ えもん</sup>與右衛門作

初代吉向治兵衛は、通称<sup>かめじ</sup>亀次。大洲藩（双海町上灘）の出身である。京都で陶法を学び、19世紀の初めに大坂十三で開窯したとされる。治兵衛の作品は、当初、<sup>ちな</sup>亀次の名に因んで<sup>かめじ おおざ</sup>亀甲焼と称したが、大坂寺社奉行<sup>ふたみ かみなだ</sup>水野忠邦に認められ、吉向号を<sup>みずのただくに</sup>拝領して吉向焼と称するようになったといわれる。また、大洲藩・須坂藩（長野県）などの各藩に招かれ、お庭焼を焼いた。

治兵衛の作品は、<sup>らくやき</sup>楽焼などを主とするが、染付・色絵など作域は多岐にわたっている。色釉は、緑釉・黄釉・紫釉などを用いている。陶技や意匠に優れており、近世屈指の名工である。

これらの吉向焼は、初代治兵衛の技法を継承した二代目<sup>おびやぶ へえ</sup>亀治と三代目<sup>ほんがくじ</sup>與右衛門の作品である。二代目の父<sup>おびやぶ へえ</sup>帯屋武兵衛の墓碑と過去帳が上灘本覚寺に残されていること、また、三代目の母サキの出跡である家に伝承と共に残される点など、この二点は吉向焼と伊予市との関わりを実証する意味において重要な工芸品である。

